

# 「頭の体操」

桑田弘一郎

池田内閣が昭和三十五年七月に発足して、しばらく経った頃だと思つた。たしか夏の暑い日で、土曜日の夕方だったと記憶している。池田首相は箱根の別邸へ静養に出かけ、永田町界隈は閑散とした空気に包まれていた。当時、首相官邸詰め政治部記者だった私は、久しぶりにのんびりした気分になり、虎ノ門の近くにある本屋に立ち寄った。その頃、私は推理小説に凝っていた。何かいいものはないかと物色していると、いきなりうしろから私の両肩を手でつかみ、ぐつと押えた者がいる。びっくりして振り向くと、それは大平官房長官（当時）だった。「えらく高級なものを読んでいるじゃないか。さすがグレート朝日だね」

大平氏一流の諧謔である。普通ならいやみたつぶりの皮肉に聞こえるこんな表現も、大平氏のある笑顔、あの口調でいわれると、全く憎めない気分になってしまう。私もつい調子に乗ってしまった。「グレート大平が、鬼（池田首相の意味）の居ぬ間の洗濯を本屋で間に合わせようというのも、あまりバツとしませんね」「ハツハツハツ……。こりゃ参った。よし、それじゃ今夜はうまいものを食おう。ご馳走するから付き合えよ」

思いも寄らぬ成行きとなつて、私は築地の「栄家」に連れて行かれた。

さて、その夜のご馳走だが、結論から先にいってしまえば、大平流「すき焼」である。「君なんか本当のすき焼のつくり方を知らないだろうな」などとときりに講釈しながら、せつせと牛肉や野菜を鉄鍋に入れ「さあできた。うまいぞ。うんと食べてくれ」。私は、すき焼は決して嫌いではない。しかしその夜、最初にまず度肝を抜

かれたのは、大皿に盛られた牛肉の量である。いったいこれが二人分なのだろうか……。こんな余計な心配をしつつ、しかも真夏のすき焼ときている。ネクタイを外し、ワイシャツを脱いでしまつたが、大汗かきかきではどうしても普段よりペースは落ちざるをえない。が、驚嘆したのは大平氏の旺盛な食欲である。大皿の肉はあらた消えていた。考えてみれば大平氏は当時五十歳。政界入りを果たしてから早くも八年目に内閣の番頭役におさまり、池田「低姿勢」政治の陰の演出者として奮闘していたのだから、その体内には政治への情熱が沸々とたぎっていたに違いない。旺盛な食欲はまさにそれを象徴していた。

頃合を計つて、池田政権誕生、自民党総裁選挙の内幕を聞き出そうと、私は話をそつちの方へ向けにかかった。しかし、肌着一枚でゆっくり団扇を使いながら大平氏は「ご馳走を食べていい気持になつているときに、そんな品の悪い話はよそつよ」と一向に乗つてこない。「それよりも、君はいつたい何のために探偵小説を読むのかね」。「何のために」といわれると、私もとつさの返事に窮した。それは、次々に展開される小説の筋を追いながら、自分なりに推理や想像を織り混ぜて、最後の結末に迫つて行く面白さ……。「要するに頭の体操ですよ」。

納得したのかしないのか、大平氏は黙つて私の顔を見ていただけであつた。私はやたらに汗を拭いた。

後日談になるが、私のこの「頭の体操」という一言は大失敗だつた。何故なら、以後、私が署名記事を書いたりすると、大平氏は決まつて私をこつ冷やかしたからである。「君の記事を読んだよ。おかげで結構な頭の体操をさせてもらったよ」。

大平氏が急逝したとき、私は「政治家・大平正芳」の生涯を評伝として論評する記事を書かされる羽目になつた。文字通り恥をかいた拙文だつたが、私には大平氏のこんな声が聞えてくるような気がしてならない。「桑田君、あの記事は頭の体操にもならないよ」。